

予報本文

イ ネ

1 晩生水稲 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、京丹後市の予察灯で誘殺を認めている。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高い(+)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

* 京都府推奨品種の晩生品種：ヒノヒカリ

黒大豆・アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆、アズキとも平年並。

項目	作物	本年	平年値
寄生株率(%)	黒大豆	2.0	4.6
	アズキ	0.4	4.7
白変葉(10a当たり箇所数)	黒大豆	4.0	3.7
	アズキ	1.1	1.2

- (2) 9月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや多く(+)、京丹後市で平年比やや少ない(-)。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	211.6	264.6
亀岡市	誘殺数(頭)	655.7	489.7
京丹後市	誘殺数(頭)	167.8	242.1

* 誘殺数(頭)：8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

2 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆、アズキとも平年比少ない(-)。

作物	項目	本年	平年値
黒大豆	寄生株率(%)	0.5	18.9
アズキ		0.0	5.4

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する可能性があるの
で注意する。

3 黒大豆 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	1.0	2.1

(2) 9月第2半旬現在、予察灯(60W)への誘殺数は、イチモンジカメムシが亀岡市で平年比やや多く、他は平年並。

種類	場所	項目	本年	平年値
アオクサカメムシ	京田辺市	誘殺数(頭)	1	0.4
	亀岡市	誘殺数(頭)	0	0.6
	京丹後市	誘殺数(頭)	0	0.5
イチモンジカメムシ	京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.1
	亀岡市	誘殺数(頭)	2	1.3
	京丹後市	誘殺数(頭)	0	0.6

* 誘殺数(頭): 8月第3半旬~9月第2半旬の合計値

(3) 9月第2半旬現在、イチモンジカメムシの予察灯(BL)への誘殺数は例年並。

場所	項目	本年	例年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.3
亀岡市	誘殺数(頭)	2	1.9
京丹後市	誘殺数(頭)	0	0.6

* 誘殺数(頭): 8月第3半旬~9月第2半旬の合計値

(4) 9月第2半旬現在、亀岡市のホソヘリカメムシのフェロモントラップへの誘殺数は例年比やや多い(+)

項目	本年	例年値
誘殺数(頭)	76.0	46.7

* 誘殺数(頭): 8月第3半旬~9月第2半旬の合計値

(5) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 成虫が最も好む時期は、莢の伸張後期から子実肥大中期で、その時期が過ぎると、より好適な食草、越冬場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま留まり、黄熟期まで加害し続ける。そのため、薬剤散布は着莢期から子実肥大中期まで10日間隔で2~3回実施する。

※今後注意すべきその他の病害虫は p 12を参照

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年比やや少ない）
 丹波 平年並（前年比やや少ない）
 丹後 平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）9月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波及び丹後では発生を認めていない（丹波：平年比やや少ない（－）、丹後：平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(枚/㎡)	0.5	4.8
	幼虫・蛹数(枚/㎡)	0.05	0.1
	発生ほ場率(%)	18.2	27.0
丹波	綴葉数(枚/㎡)	0.0	2.6
	幼虫・蛹数(枚/㎡)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	0.0	30.0
丹後	綴葉数(枚/㎡)	0.0	0.1
	幼虫・蛹数(枚/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	5.0

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫が、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
- （2）ふ化した幼虫は葉を綴って食害するようになるため、薬剤がかかりにくいので注意する。
- （3）近年、山城地域においてジアミド系及びIGR剤に抵抗性を発達させた個体群が確認されている。そのため、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
 丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）9月中旬現在、発生量は山城で発生を認めず（平年比少ない）（－）、丹波及び丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	0.0	9.5
	巻葉数(枚/㎡)	0.0	3.6
	発生ほ場率(%)	0.0	49.5
丹波	寄生芽率(%)	0.0	2.4
	巻葉数(枚/㎡)	0.5	0.5
	発生ほ場率(%)	16.7	40.7
丹後	寄生芽率(%)	0.5	2.0
	巻葉数(枚/㎡)	0.3	0.9
	発生ほ場率(%)	50.0	47.5

（2）向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 特に、自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し、越冬密度を下げるようにする。
- (2) 被害葉は、チャノキイロアザミウマやカンザワハダニの発生源になるので注意する。

3 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年並）
 丹波 平年比やや少ない（前年並）
 丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は山城及び丹波で発生を認めず（山城：平年比少ない（－）、丹波：平年比やや少ない（－））、丹後では平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	0.0	3.9
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	14.9
	発生ほ場率(%)	0.0	32.3
丹波	寄生葉率(%)	0.0	1.3
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	4.6
	発生ほ場率(%)	0.0	25.0
丹後	寄生葉率(%)	2.0	7.7
	寄生虫数(頭/100葉)	2.5	72.7
	発生ほ場率(%)	25.0	37.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
- (2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。11月中旬に防除する。

※今後注意すべきその他の病害虫はp12を参照

野菜

1 アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、キャベツ、カブで発生を認めていない（キャベツ：例年並、カブ：例年並）。

作物	項目	本年	例年値
キャベツ	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	0.0	6.3

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2 アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）９月中旬現在、カブで発生を認めていない（例年並）。

作物	項目	本年	例年値
カ	ブ 発病株率(%)	0.0	0.8

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または多く（＋）、日照時間は少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- （２）強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- （３）肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- （４）多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

3 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）本年５月の発生量は、平年比やや多い（＋）。

項目	本年(5月)	平年値(5月)
発病株率(%)	2.4	0.7
発生ほ場率(%)	40.0	3.3

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年並または多い（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発生終期に菌核が形成され、土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で２～３年間生存する。
- （２）適温は２０℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- （３）発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

4 アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）９月中旬現在、キャベツで黒腐病の発生を認めず（例年並）、ダイコンでも黒斑細菌病の発生を認めていない（平年並）。

作物	病害名	項目	本年	平年値
キャベツ	黒腐病	発病株率(%)	0.0	0.8
ダイコン	黒斑細菌病	発病株率(%)	0.0	0.0

（２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多く（＋）、日照時間は少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長する。
- （２）降雨日数と発生量との相関が高い。
- （３）台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努め

る。

5 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）９月中旬現在、キャベツでの発生は例年比やや多く（＋）、ダイコン、カブでは発生を認めていない（ダイコン：平年並、カブ：例年並）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.1	0.2
	寄生株率（％）	1.0	1.5
ダイコン	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.0	0.03
	寄生株率（％）	0.0	0.3
カブ	幼虫・蛹数（頭／10株）	0.0	0.0
	寄生株率（％）	0.0	0.0

（２）９月第２半旬現在、予察灯（60W）への誘殺数は京田辺市で平年並、亀岡市および京丹後市で平年比やや少ない（－）。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	4	4
亀岡市	誘殺数(頭)	0	2
京丹後市	誘殺数(頭)	1	2

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

（３）９月第２半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で誘殺を認めず、亀岡市で平年比やや多く（＋）、京丹後市で平年比少ない（－）。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0.0	(0.8)
亀岡市	誘殺数(頭)	10.1	5.4
京丹後市	誘殺数(頭)	0.0	1.8

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

※ 京田辺市の平年値は、平成27～29年の3年間の平均値

（４）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または多い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- （２）雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- （３）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- （４）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

6 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）９月中旬現在、キュウリ、ナス、キャベツ、ダイコンとも発生を認めていない（平（例）年並）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生株率(%)	0.0	0.0
ナス	幼虫数(頭/葉)	0.00	0.02
キャベツ	寄生株率(%)	0.0	2.4
ダイコン	寄生株率(%)	0.0	0.3

(2) 9月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや多く(+)、京丹後市で平年比やや少ない(-)

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	211.6	264.6
亀岡市	誘殺数(頭)	655.7	489.7
京丹後市	誘殺数(頭)	167.8	242.1

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬~9月第2半旬の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

7 ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 9月第2半旬現在、予察灯(60W)への誘殺は京田辺市、京丹後市で平年並、亀岡市で平年比やや少ない(-)。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	1	1
亀岡市	誘殺数(頭)	0	3
京丹後市	誘殺数(頭)	1	3

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬~9月第2半旬の合計値

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。

(2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

8 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は平年比少ない(-)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	22.0	70.3
被害度	5.7	20.7

- (2) 一部、多発ほ場がみられる(+)。
 (3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
 (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
 (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとどめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

9 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量はナス及びカブで平年比少なく(-)、キュウリで例年並。

作物	項目	本年	平年値
ナ ス	被害葉率(%)	0.9	20.4
	被害株率(%)	5.1	50.3
キ ュ ウ リ	被害葉率(%)	2.0	4.3
	被害株率(%)	6.0	53.4
カ ブ	被害株率(%)	0.0	0.8

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
 (2) 幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
 (3) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

10 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	32.7	17.1
被害度	8.2	4.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多い(-)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
 (2) 本種は府内各地で発生が問題となっているネギえそ条斑病を媒介する。
 (3) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 新系統（産雄性生殖系統）と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域（山城及び南丹地域）では注意する。

* 詳細は平成29年3月27日付け「防除所ニュース平成29年第3、4号」
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news3go_iysv_negiazamiума.pdf
http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news4go_negiazamiうmakeitou_hoka.pdfを参照のこと。

1 1 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、ネギの小株で平年比やや多く（+）、ネギの大株で発生を認めている。

株の種類	項目	本年	平年値
小株	幼虫数(頭/株)	0.00	0.01
	寄生株率(%)	4.00	0.8
	発生ほ場率(%)	33.3	13.9
大株	幼虫数(頭/株)	0.00	—
	寄生株率(%)	0.0	—
	発生ほ場率(%)	75.0	—

*小株:葉長概ね40cm未満、大株:葉長40cm以上

- (2) 9月第2半旬現在、京田辺市のフェロモントラップへの誘殺数は10年平均値を大きく上回っている（+）。

場所	項目	本年	平均
京田辺市	誘殺数(頭)	141.7	28.7

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

※ 平均:平成18～26年、平成29年の平均値

- (3) ダイコン、キャベツで発生を認めている（+）。
- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

* 詳細は平成30年8月30日付け「病害虫発生予察注意報第4号」、平成30年8月1日付け「病害虫発生予察注意報第3号」
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h30tyuiho4.pdf>
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/h30tyuiho3.pdf>を参照のこと。

1 2 野菜類全般 タバコガ類 [オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

(1) 9月第2半旬現在、オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比多く(+)、京丹後市で平年比やや多い(+)

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	1.7	1.7
亀岡市	誘殺数(頭)	220.8	36.6
京丹後市	誘殺数(頭)	4.0	1.3

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

(2) 9月第2半旬現在、タバコガのフェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で平年比少なく(-)、亀岡市、京丹後市で平年比やや少ない(-)

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	2.4	18.2
亀岡市	誘殺数(頭)	15.1	32.3
京丹後市	誘殺数(頭)	2.0	13.9

※ 誘殺数(頭)は8月第3半旬～9月第2半旬の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が食入しているトマト、ナス、トウガラシ等の果実は処分する。
- (2) 幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。
- (3) オオタバコガはナス科、マメ類、アブラナ科野菜等広範囲の野菜、タバコガはナス科野菜を加害するとされている。

13 アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ [ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、ダイコンでは発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
幼虫数(頭/10株)	0.0	0.2
寄生株率(%)	0.0	1.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は平年並または多いと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害になるので注意する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止したままとなったり、枯死するものが多い。
- (3) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。
- (4) ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に注意して観察し、発生を認めた場合は、直ちに防除する。

※ 今後注意すべきその他の病害虫は p 12~13 を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

アズキ

1 子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

子実害虫類は、幼虫が莢や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。

2 オオタバコガ

上記の子実害虫類に加え、オオタバコガの発生にも注意する。9月中旬の巡回調査で発生を確認している。

本種は、葉だけでなく、子実も加害する。登録薬剤には、BT剤(サブリナフロアブル、チューンアップ顆粒水和剤、デルフィン顆粒水和剤)がある。

チャ

1 チャノミドリヒメヨコバイ

山城、丹波及び丹後地域の一部の茶園で多発を認めている。

本種による吸汁被害が進むと新芽の生育が止まり、落葉するので、収量、品質が低下する。

本種の発生が目立つ園では、秋芽の開葉期を重点に薬剤散布を行う。

2 チャトゲコナジラミ

現在、府内全域で発生を確認している。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ち着いた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、キスジノミハムシ、コオロギ等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。

2 ネギベと病

前年（平成29年）は、4月下旬から梅雨明け時まで多発した。9月下旬以降、平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。

3 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミによって媒介される。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミの防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

（1）黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。

（2）先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮

しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

4 タバココナジラミ

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプ J p L 等）、バイオタイプ B、バイオタイプ Q が確認されている。

バイオタイプ Q は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。

- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。

- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報

(9月15日から10月14日までの天候見通し)

平成30年9月13日

大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	30	60
降 水 量	20	40	40
日 照 時 間	50	30	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または多く、日照時間は少ないと予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 --- 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 --- 原則として過去10か年の平均とする。

データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病虫害発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数 (/m ²)	3.0	0.1
	幼虫数 (/m ²)	0.5	0.0
	発生ほ場率 (%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数 (/m ²)	0.0	0.5
	幼虫数 (/m ²)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数 (/m ²)	0.0	0.0
	幼虫数 (/m ²)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病虫害の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量 (ADI) を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量 (ARfD) を超えないかという点についても評価されること (短期暴露評価) となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容 (商品名、変更事項等) が発表されます。これらの農薬は変更登録の前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようにしましょう。

(ご注意)

本内容は、国 (農林水産省等) や農薬メーカーからの情報を府民の皆さまにお伝えするために掲載しています。したがって、掲載するまでに時間がかかることがあります。

1 最新の使用基準を確認して使用していただきたい農薬

※ラベルどおりに使用すると問題となることがあるため、最新の使用基準を各農薬メーカーのホームページ等で確認してください。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

2 今回の制度の導入により使用基準の変更があった農薬

※ラベルどおり使用していただければ問題ありません。

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
ジメトエート (平成27年2月4日)	ジメトエート乳剤、ジメトエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
シハロトリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン (平成27年11月25日)	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン (平成28年10月19日)	サンマイトフロアブル、サンマイト水和剤	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
イプロジオン (平成28年4月20日)	ロブラール水和剤、ロブラール500アクア	適用作物削除 希釈倍数変更
ジラム (平成28年4月27日)	コニファー水和剤	適用作物削除
チオジカルブ (平成28年11月2日)	ラービンフロアブル、ラービン水和剤75	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更
クロルフェナピル (平成28年11月30日)	コテツフロアブル	適用作物削除 使用時期変更
トルフェンピラド (平成29年10月25日)	ハチハチ乳剤、ハチハチフロアブル、 アクセルキングフロアブル	適用作物削除 使用時期変更 使用回数変更

※ 変更の詳細については下記の農薬工業会のサイトにて確認することができます。
(要登録) また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

○ 参 考

厚生労働省(急性参照用量(ARfD))を考慮した食品中の残留農薬基準の設定について)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040984.pdf> (外部リンク)

<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11121000-Iyakushokuhinkyoku-Soumuka/0000040985.pdf> (外部リンク)

農林水産省農薬コーナー(農薬に関する施策関係)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/> (外部リンク)

独立行政法人農林水産消費安全技術センター(農薬登録情報の検索)

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html> (外部リンク)

農薬工業会(使用制限にかかわる登録変更)

http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (外部リンク)

詳しくは、京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト

(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>) をご参照願います。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コーナー」の「農業情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サービス

・ ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成 9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －